
～転生～Until The Day I Die

ATGTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～転生～Until The Day I Die

【Nコード】

N7973N

【作者名】

ATGTA

【あらすじ】

ある日、成り行きで転生することになった主人公。そんな彼は、特別な能力を持って幾つかの世界へ向かう。

第二の人生を手に入れた彼は、一体どのような日々を送るのか？

プロローグ（前書き）

誤字脱字や原作崩壊の内容などで読者の皆様を不快にさせることもあるかと思いますが、温かい目で見えて貰えると幸いです。

プロローグ

「お兄ちゃん！起きて！朝だよっ」

まどろんでいる俺の耳元から、目覚まし代わりの可愛らしい妹の声
が飛び込んでくる。

「もおっ！お寝坊さんもいい加減にしてよね！今日から学校、始
まるんでしょ？」

ゆっさゆっさと身体が揺すられる。

「早く起きてくれないと、朝ごはん作ってあげないんだからね！」

そんな嬉しいイベントがあるなら、俺はどれほど幸福な人生を送っ
ていただろうか……残念ながら、そんな記憶はない。

「ほら、早く起きてよ」

ゆっさゆっさ。

「うう、困ったお兄ちゃんだよ」

ゆっさゆっさゆっさ。

「起きてくれたらこの前約束したアレ……してあげるんだけどなあ」
なに！？

この前約束したアレっつーと、人前ではとても言えないあんな事やそんな事か!?

「いやっほーう!! 妹よ、そういう事ならお兄ちゃんすぐ起きて……あれ?」

部屋のどこを見てもそのような妹はいない。

いや、いるはずもない。

「……ギャルゲーのやり過ぎかな?」

俺、^{アジョウトア}亞城都亜は、ほんのちょっぴりオタクな高校二年生。

親は仕事が忙しく家にはほとんどおらず、ましてや、妹などいない一人っ子なので、現在この家には俺しかない。

「何をやってんだ俺は……」

恥ずかしさのあまり、一人で悶え苦しんでいる姿など考えれば考えるほど、悲しくなってくる。「約束のアレってなんだよ……俺は妹とどんな約束してんだよ……」

ぶつぶつと、いもしない夢の中の妹と自分の関係を危惧しながら制服に袖を通し、リビングへとやって来る。

「モグモグモグ。やっぱ、このままじゃ駄目だよな……」

顔を洗ってトーストをかじりながら、さっきのことをひそかに反省する。

「はぁ……刺激的な何かが起こらないかね」

ピンポーン。

「ん、誰だ？」

トーストを一枚食べ終わると、玄関のチャイムが鳴り響く。

俺はコップに残った牛乳を一口で飲み干し、玄関に向かった。

「あれ？」

鍵を外し、扉を開ける。

しかし外に出ても誰もいない。

代わりに足元に封筒が一通落ちていた。

「何だこれ？ラブレター？いや、ベアトリーチェの手紙か？」

屈み、それを拾う。

封筒をぞんざいに破り、中の手紙を引っ張り出す。

中には、綺麗な文字で、メッセージが記されていた……。

「『初めまして、亞城都亜さま。』……俺の名前を知ってる奴か？」

さらに読み続ける。

「『今夜、あなたを素晴らしい世界へお連れします。』……………え？』」

内容はここで終わっている。

「おいおい、何だこれ？」

気味が悪かったが、学校に遅れそうだったので、放っておくことにした。

・

・

・

季節は八月。

視線を上げればコバルトの空。真っ白な入道雲がどこまでも続いている快晴の日、亞城都亜は大量の汗をかきながら、現在在学中の高校へと続く坂道を歩いている。

「なんで夏休みなのに学校に行かなくちゃいけないんだよ……」

中肉中背で不健康そうな真白な肌をしたこの男は、登校日以外は基本的に家から出ない。

しかし、本来ならほとんどの学生が夏期休講に入っているこの時期、『亞城ちゃん、バカだから補習ですー♪』と、とある小説のロリ担任のような口調で話す、現担任直々のラブコールを受けたのだった。

まあ、勉強をそっちのけて、アニメとゲームばかりに興じていたら基本的に良い点数は取れないだろう。

本人が言うには、「早く帰れるテスト期間中だからこそ出来ること」らしい。

「あーだりー……って雨？」

突然、空が雲に覆われ、雷を轟かせながら、豪雨を降らせてきた。

「おいおい、どういうことだ？ さっきまであんなに晴れてたのに……」

男はずぶ濡れになりながら走る。

「ちくしょう、不幸だーっ！！」

・
・
・

「どうなってんだ、一体？」

夜、俺は今日の出来事を一人振り返っていた。

学校に行けば、急な用事とかで担任は出かけてるわ、携帯や財布は落とすわ、家の前で交通事故が起きるわ、とにかく散々な一日だった。

「あー、こんな日は早く寝よ。明日も補習あるし」

そして、亞城都亜は意識を落とした。

——目覚めよ。

「……」

——秘めし内なる力、それを解放する時が来たのだ。

「……」

——そつとひらけその目を。その閉じられた限界への扉を——。

「……ん」

——目覚めよ、選ばれし者——。

「……どこだ……ここ？」周りを見渡すと、白、白、白。
一面真っ白な世界が果てしなく広がっていた。

『ようやく目覚めたか』

「うおあつ!?!」

『そこまで驚くことはなからう……』

いつから居たのだろう、目の前に初老の男性が立っていた。

「すみません……えと、あなたは？」

『うむ、自己紹介が遅れたな。我は■■■■■■』

「あの、聴き取れないんですけど……」

『私の名前はお前達の世界の言語では表すことができないからな』

「……お前達の世界？」

『まあ、我はお前達の世界での神に近い存在だ。気軽に神様とでも呼んでくれ』

「あの……話についていけないんですが」

『聞きたいことがあったら……つとなんだ、まだ状況を掴んでないのか？』

「……いや、普通無理だろ。」

「……えーと、それじゃあ、ここってどこなんですか？」

『ここは天界と人界の狭間の世界。お前は死んだのだ。覚えていないかも知れないがな』

「……………はっ?」

さらりと問題発言しなかったか？

「し、死んだって……俺が!？」

『そうだ。お前の頭上に雷が落ちて死んだ』

(雷って、どんだけ不幸なんだよ俺……)

「それじゃあ、今から天界ってところに連れてかれるんですか？」

『普通ならそうなんだが、今回は特例だ』

「特例？」

『そうだ。今回お前が死んだ原因は我にある』

「どういうこと？」

『お前が死んだ原因である雷。あれは、我がお前に当たるように降らせた雷だ』

「……………」

『大変すまないとおもっブホオ』

とりあえず一発殴つていた。

『な、なにをする!!!』

「それは、俺のセリフだ!!!! てめえのせいで死んだんじゃないか
!!! 何の嫌がらせだ!!!!」

『ま、まあ落ち着け。これには深い理由がある』

「言ってみろ。深くなかったら殺す」

『ハッハッハッ、お前神を殺すって（笑）……ブホア』

俺はまた、顔面に拳を叩きこんだ。

「いいからさっさと話せ」

『うむ、理由は他でもない、暇だった。そしてこれからお前をどこかの世界に転生させる。だから我を楽しませろ』

……あれ？

おかしいな。我を楽しませろとか聞こえたんだけど？もしかしてそんなことの為に俺は死んだの？

『概ねこんなところだ。まあ、一応手紙にも簡単に書いておいただろう？』

「手紙？」

……ああ、朝のか。

簡単に書きすぎだろ。

「とりあえず、転生するのは良いんだけど後十回殴らせて♪」

・

『き、気が済んだか……』

「全然♪」

（まあ、今はこのぐらいで許してやる）

「しかし、転生か」

思えば、来る日も来る日も二次元に浸っていた毎日。それはこんな時のための伏線だったと言っても過言ではないのかもしれないな。

『それでは、今からしきたり通りお前にオプションを付ける』

「オプション？」

『簡単に言うと、好きな能力を与えてやるということだ』

「マジで!？」

『だが、数に限りがある。我の力だと一人三つだ』

「三つか……」

『思考する時間が必要か?』

「いや、大丈夫。まず『武装錬金』の《ヴィクター化》。んで、《エネルギードレイン》は任意で発動出来るように。次に『金色のガ

ツシュ!!』のクリア・ノートの術を全て使えるように頼む」

『わかった。三つ目はどうする。保留にすることも出来るが……』

「あと一つか………」

何事も、残り一つと言われると結構迷うものである。

「———保留で」

まあ、今決めるのは早計だな。

『承知した。では、今から転生させるが準備は良いか?』

「えーと、質問。俺の衣住食はどうすれば?」

『ああ、それは私の力で何とかする。他に質問は?』

「ん……特に無いな」

『そうか。では、行ってこい』

神様がそう言った直後、俺の視界は光に包まれた。

あまりの明るさに反射的に眼を閉じる。

何とも形容のしようがない浮遊感と眠気が俺を襲う。

そして、再び眼を覚ました時、世界が変わっていることを信じながら、俺は意識を手放した。

第一話 転生（前書き）

投稿が遅めの第二話です。

これからも不定期更新が続くと思いますが、どうぞ宜しくお願いします。

第一話 転生

「……………やっぱり……夢じゃ無かったのか」

———どうやら、俺は転生したようだ。

最初は半信半疑だったのだが、ある出来事によって、つい先刻のやり取りが事実だったということが分かった。

それは、先程と場所が変わっているということだけではない。

道を歩いている最中に、ある人物と出会い、そして、その人物に亜城都亜は心当たりがあったからだ。

その人物の名は——、

……遡ること数分前……

亞城都亜は公園のぶらんこに乗っている状態で眼を覚ました。

「……………ん、……………ここは？」

季節は夏なのか、気温は暑く、太陽がギラギラと照っている。周囲を見渡すが、人の気配は無い。

「やっぱ、転生したのか？」

今だに信じられないが、根拠が無いので何とも言えない。

念のため服装もチェックしてみるが、なにも変わってないようだ。多分、こういう時に『能力を使って調べる』という選択肢もあるはず、いや、あったはずなんだが、

「……………何で俺は危険な能力ばっか選んでんだ？」

能力が能力なだけに、そう簡単に発動することは出来ない。基本的に戦闘以外では使えない能力を選んだ自分の考えの浅はかさに頭を抱える。

「……………とりあえず歩くか」

最終的に、動いてみないと何もわからないという結論に至り、周囲の散策を始めることにした。

「ふーむ、見た感じ日本の風景だよな」

それが、歩き始めてすぐの感想。

気温といい、家の形状といい、完全に日本そっくりである。

ドン。

「ん？」

横を向きながら歩いていたら、小さな子供にぶつかってしまったようだ。

「おっと、ゴメン。大丈夫？」

「あ、うん。私は大丈夫だよ」

ぶつかった相手の身体に視線を向ける。

その瞬間、俺は言葉を失った。

ピンク色の髪に、大きな瞳、小柄な体格で、何よりも超美少女。

俺は知っている。

この少女の名前を。

「どうしたの？」

「……桜野……くりむ？」

・

・

・

つまり、俺は「生徒会の一存」シリーズの世界に転生させられたということか。

特に不満は無い……というか超嬉しいのだが――…。

「選んだ能力を使う機会が無いじゃん……」

「？」

目の前の愛らしい少女が首を傾げながら、クエスチョンマークを浮かべている。

完全なる誤算だった。

俺は転生と聞いて、『なのは』や『Fate』の世界のような戦闘系の世界だと思いこんでいたのだが、まさかの超平和な世界である。

「ハア……」

「……大丈夫？」

落胆している俺に、碧陽学園の会長さんが話しかけてくる。

……まあいい。能力は無意味になったが、今は精一杯楽しもうではないか！

俺は、会長さんの好感度を上げるべく、最適な計画を練り始めた。

・

・

・

どうしたんだろう？

私とぶつかった高校生ぐらいの男の人が、急に黙りこんでしまった。

そんなに痛かったのかな？

……………ハッ！そうか！

お詫びの品を考えてるんだね！

なら私は、どーなつが食べたいなあ。

そんなことを考えていると、彼が口を開いた。

「本当にゴメン！お詫びにドーナツでも奢るよ」

キターーーーー！

私の気持ちが伝わったんだね！？

「うん！食べる食べる！」

私はすぐに返事を返した。まさかどーなつを奢って貰えるなんて、今日はいいい日だよお。

・

・

・

ふははは、計画通り！！

気持ちいいほど見事に釣られてくれたぜ！

俺の考えた計画とは、食べ物で誘惑し、そこから仲良くなっ
ていこうという単純なもの。

さらに会長さんがドーナツ派ということは、原作でわかっている。

完璧……、完璧だッ！！

「ふふ、うふふふふ」

「!?!」

おっと、心の声が漏れてしまったぜ。気をつけねば。

会長が若干引いているので、すぐにドーナツを買いに行こうとする。

「じ、じゃあ、行こうか」

「……………」

が、肝心の会長さんが動いてくれない。

やはり、さっきの心の声が悪かったのかなと思いながら、とりあえず近寄ってみる。

——だが、原因は違っていた。

会長に触れてみたが、石像のように全く反応がない。

いや、それどころか周囲から物音一つ聞こえない。

まるで、俺以外の全ての時が止まってしまっているかのように――
…。

「……どうなってんだ？」

俺はすぐさま思考を巡らせた。

一体何が起きたのか。

誰の仕業なのか。

何をすれば良いのか。

考えても何一つわからない。

恐怖、疑惑、焦燥……、多くの感情が身体の奥から押し寄せてくる。

だんだんと鼓動が速くなってくるのがわかる。

『あああああああああああああッ！！』

「ッ！！？」

いきなりの大声に驚き、後ろを向く。

『ふむ、面白いほど驚いてくれたな』

……心臓が止まるかと思った。

『そうそう、そういう顔が見たかった』

声の主は、多分一生忘れないだろう、俺を殺した本人、つまり神様だ。

「……どこにいやがる」

だが、振り向いても姿は見えず、声だけがどこからか聞こえてくる。

『まあ、そうカッカするな。我はその世界にはおらん。今は直接お前の頭に語りかけている』

ああ、なるほど。

「……オーケー。で、何の用だ」

『うむ。とりあえず、我的世界に連れ帰るぞ』

「は？」

……いつの間にか、会長は消え、風景は視界全体が真っ白に変わっていた。

『おかえり、亞城都亜』

「……で、用事は？」

『ふむ、どこから説明しようか。まず、転生のことは信じて貰えたかな？』

「……まあ、さすがに信じるしかないだろう」

『うむ、よろしい』

神様はさも満足したかの様に頷きながら、言葉を続けた。

『勘違いしているようだから言うておくが、転生させるのは、何も一つの世界だけではないぞ』

「は？」

一つじゃない？それって――……。。

「いろんな世界に行けるってことか？」

『その通りだ』

マジかよ。

『それでだ、お前も分かる通り今の世界は、魔法や超能力、火器などを使うような戦闘系の世界ではない』

「ああ、分かってるけど？」

『なぜ最初にその世界に送ったのか分かるか？』

「えーと、神様が楽しむためじゃないのか？」

『まあ、それもあるんだが、一番の理由は転生したという自覚を持つて貰いたかったからだ』

「……？、……どういこと？」

『例えばの話をしよう。もし我が今回のように何も言わず、『Fate／stay night』の世界に転生させたでしょう』

「……………」

『それで、最初に『バーサーカー』のような者と出会ったら、対抗できると思うか？』

「それは……………」

出来る、と言おうとしたが、神様の言葉で遮られた。

『おそらく、『出来ない』だろう。確かに、お前には能力を与えた。だが、いくら強い力を持っていたても、もともとは普通の人間。恐怖に吞まれて、死を迎えるだけであろう』

「ッ……………」

反論できない。

確かに、戦う以前の問題かもしれない。

「で、でもアンタの力なら、蘇らせることもできるんじゃない?」

「確かに、我なら出来る。だが、しない。そもそも死者を蘇らせること自体、基本的にタブーだからな」

「そんな……………」

一回死んだら、そこで、終わり…………。

『だからこそ、自覚を持って貰いたかったのだ』

「……………ああ、分かった」

「うむ、よろしい」

神様はニカッと笑い、俺の肩に手を置いた。

『では、真面目な話はここまでにして、次の世界の事について話しましょう』

「……オーケー。で、次はどこに行くんだ？」

『うむ、とりあえず戦闘に慣れてくれないとな。というわけで、『とある魔術の禁書目録』の世界に行ってもらおう』

「インデックスか……」

チートキャラも何人かいるが、確かに練習には適しているな。

「うん、悪くない」

『まあ、少し長めになると思うが、頑張ってくれ。それと今回の場所とはチュートリアルとして、他の転生者も同時に送る予定だからな。仲良くするも、敵対するも好きにしろ』

「他の、転生者？」

おい、初耳だぞ。

『ふむ、話してなかったか？』

「いや、これっぽちも聞いてないんだが……」

『ま、まあいい。そういうわけだ。ああ、安心しろ、他も皆新人だからな。今は平和な世界で楽しんでいる最中だ』

「ふーん」

他の転生者か。

まあ、楽しませてもらうか。

『では、そろそろ送るが準備は良いか？』

「ああ、行ってくる」

『生徒会の一存』は名残惜しいが、頑張ってきますか。

第二話 八月十五日（前書き）

そういえば、もう少しで禁書目録の最新刊が発売されますね。

第二話 八月十五日

———またかよ。

———公園好きだな、俺。

神様の世界に居た俺は、『とある魔術の禁書目録』の世界に転生した……らしい。

今回は公園のベンチに横になっている状態で転生したようだ。

「なんだろう、俺と公園の間に見えない絆でもあるのか？」

公園とは、そこまで深い思い出は無い筈なので、偶然なんだと決めつける。

「ここってあれか、美琴が池に飛び込んだ場所？」

とりあえず、公園のことから思考を切り替えようと自分自身に言い聞かせるかのように、無理矢理そう判断した。

「まず、今が何月何日か調べないとな」

予想では夏だと思う。

というか、俺が知ってる禁書目録の原作は大体その時期なはずだ。

ついでに時間は、天候からして、およそ昼ということは分かる。

「この世界は、一年の間に何度も事件が起こるもんなあ。……………」
戦争も起きるし」

そういえば、長い期間って神様は言ってたけど、どのくらいなのか？と周囲を歩きながら疑問に思っていると、見知った顔の人物を見つけた。

「シスターズ『妹達』……………」

まあ、見知ったと言ってもこちらが一方的に知っているだけだがな。

『妹達』とは、簡単に説明すれば、『学園都市』に七人しかいない『超能力者』の『第三位』である『御坂美琴』のクローンである。

俺は情報を集めるべく、すぐに彼女に近づいた。

「ゴメン、ちょっといいか？」

「はい、なんでしょう、とミサカは白昼堂々ナンパしてくる男に軽

蔑の眼差しを向けながら答えます」

いや、ナンパって決めつけんなよ！と心の中で突っ込みを入れながら話し続ける。

「ナンパじゃないんだけど、ちょっと今日が何月の何日か教えてくれないか？」

「今日は八月十日です、とミサカはあなたの生活状況に疑問を抱きつつ素直に教えます」

八月十日ね……。

およそ、美琴が実験に気付いた頃か。

「オーケー、ありがとう。お礼にアイスでもどうだ？奢るぜ？」

「遠慮しておきます、とミサカは丁寧に断ります」

「……そうか、じゃあな」

そう言って、彼女と別れた俺は、神様が用意しているという住居へと向かった。

・

・
さて、これからどうするか。

・
神様が用意してくれた住居とは、普通の学生寮だった。
部屋の中には、冷蔵庫やエアコンなど必要最低限の物しか置いてない。

他に欲しい物は自分で揃えろということだろうか、諭吉の束がクロ
ーゼットの中に大量に入っていた。

「美琴を手助けするか、それとも無視するか……」

ここで介入してしまったら、未来は俺が知らないモノに変わってしま
う気がする。

・
（確か美琴と一方通行が邂逅するのは八月十五日……。とりあえず、
その日に備えて、準備しておくか）

・
・
そして、八月十五日の早朝。

亜城都亜は第一〇学区に存在する『ストレンジ』と呼ばれる地域で能力のチェックをしていた。

「ふう……」

俺がこの場所を選んだ理由は、他の学区とは違い荒れているこの場所なら、人もあまり居らず存分に力を揮えると判断したからだ。

事実、今まで見かけたのは、夜通しで遊んできたと推測されるゴロツキの集団だけである。

たまに、絡まれることもあったので、能力の練習台として、最大限に利用させて貰った。

「さて、今から朝食を取ってと、残りはどうすっかな。バイト探し

でもしてくるかなー」

など考える。

実際の年齢は学生だが、ここでは学生では無いため、毎日が暇なのである。

基本的に、所持金は減ってもすぐに神様が補充してくれるので、そっち方面は困らず、バイトは気晴らしとしてする予定だ。

「フハハ、夜が楽しみだぜ!!」

——そうして、夜になるまでの時間を亞城都亜は職探しの旅へと費やした。

・

・

・

八月十五日 二二時00分

とある路地裏で、二人の少年少女が対峙していた。

「これより第九九八二次実験を開始します」

一人は、『妹達』の一人。

そして、もう一人は『学園都市』が誇る『第一位』の『超能力者』。

「さて、どうすっかなー」

その今から始まろうとしている『実験』を、亞城都亜は遠くから見
ていた。

現場に来たものの、どんな時に動けば良いのか分からないのである。

「……まあ、タイミングは勘に任せるとして……っと、移動したか」

考えているうちに、二人とも何処かへ行ってしまったようだ。

「まあ、居場所は分かってるけど」

昼の間に一通りこの辺りは見て回った為、自分の記憶と照らし合
わせれば、向かった場所は橋梁の下線路がある場所だと定まっ

る。

———武装鍊金。

すぐに追いかけようと『ヴィクター化』を始める。

身体はヴィクター特有の、髪は螢火、肌は赤銅色へと変わった。

ちなみに、朝にも試したが、頼んだ通り『エネルギードレイン』は制御出来るようだ。

まあ、制御出来なかったら、神様のエネルギーを吸いつくすつもりだったけどな。

「おっと、『超電磁砲^{レールガン}』のご到着だ」

飛行しようと構えた時、視界の端に美琴の姿を見つける。

ということは——…。

ドッゴォオという爆音が響いた。

——そろそろ終盤だな。

俺は急いで現場へ飛び、『実験』をしている二人の姿を捕えた。

ミサカの左足は千切れており、身体中が傷だらけなのに對し、一方通行は全くの無傷である。

「ひでえーな……」

一方通行の心情は知っているとはいえ、さすがにあればやり過ぎだ
と思う。

「終わりにしてやんよ」

一方通行は、近くにあった列車を御坂妹の頭上へと飛ばす。

「うそ、うそっ、そんな…」

美琴も追いついたようだが、もう間に合わない。

そして——…。

•

ドゴッシャアという音と共に列車は落ち、その下にいたミサカは――
――。

――確認するまでもない。

「本日の実験、しゅーりよォー」

そう判断した一方通行は、後始末に疑問を抱きつつ、帰ろうと足を
進め――。

「わあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ッ！！！！」

その光景を見ていた美琴は、雄叫びを上げながら一方通行へと向か
った。

勝敗はすでに分かりきっており、このままいけば美琴の完敗という
結末になる。

——直後、ドゴォンという音が響いた。

二人の間に、何かが投げ込まれたのだ。

——いや、何かではない。

それは、つい先程、一方通行がミサカへ向けて、息の根を止める為に放った物と全く同じもの。

もちろん、この動作に、二人は関係していない。

考えられることは二つ。

一つは、ミサカが投げ返した。

二つ目は、他の誰かが投げた。

二人は、ほぼ同時にミサカのいた方向を向き、答えを知る。

「——そこまでだ」

そこには、傷だらけのミサカを左腕で抱きかかえている、人間離れた身体を持った男が立っていた。

「ンだオマエは？」

一方通行は、男を睨む。

実験を邪魔されたことに興醒めしているのか、それとも、おそらく列車を投げたであろう男に興味を持ったのか――…。

男は徐々に美琴に近づいてくる。

「アンタは？」

美琴も、突然現れた男に驚きを隠せなかった。

彼女は男に向かって手を突き出す。

握り締めた手の親指にはコインが握られていた。

「おいおい、コイツの命の恩人にそんな物騒なモノを向けるのか？」

男は、ミサカを指差しながら、笑って答える。

まあ、早く医者に連れて行かないとヤバイかもしれないが、と付け足しながら。

「ッ……！！！」

美琴は警戒しながら、向けていた腕を下ろす。

男はその動作に満足したように、オーケー、と言いながら、美琴の横に並んだ。

「おいおい頼むぜ。関係ねエ一般人が『実験』の秘密を知ったら口を封じる、とかってエお決まりの展開かア？」

「ああ、気にするな。『実験』は前々から知ってたからな」

男は一方通行に話しかける。

なおも笑いながら、さも『最強』の『第一位』の前でも余裕があるかのように。

・

・

・

「それでだ、俺はこれからこの娘を医者に連れて行くが、どうする？もう一度俺ごと再殺するか？」

「ハッ、図に乗ってンじゃねエぞ三下がア!!」

一方通行は一步踏み出した。

瞬間、彼の足元の砂利が爆発する。

「ちょ、はやッ!!」

おそらく、足にかかる運動量の『向き』を変更させたのだろう。
一気に間合いを詰め、俺の懷へ飛び込んでくる。

「おら、死ぬ気で避けなきゃホントに死ンじまうぞオ!!」

「いや、もう避けれる距離じゃねえよッ!!」

一方通行は、俺の腹に蹴りを入れ、その衝撃に耐えられなかった俺は、抱えていたミサカと共に吹き飛ばされた。

「がっ、は……ッ！」

ミサカは地面に身体を強打し、息を吐く。俺とミサカの身体が、ゴロゴロと地面を転がる。

（――野郎、こっちは手負いの少女というハンデを背負ってる
つーのに、容赦ねーな）

そんなことを思いながら、ミサカの安否を確認し、再び起き上がる。

「アッハア！ほら、遅せエ、遅せエ、全然遅せエ！」

だが、一方通行は止まらない。

またもや、俺との距離をゼロにし、猛攻を続けてくる。

ヤバ、やっぱパネエ……。

突如、ゴオツという音と共に、砂鉄の嵐が一方通行に襲い掛かった。

「……？、……この技」

俺は、能力を使用したであろう美琴へと顔を向けた。

「アンタ、大丈夫！？」

「ああ、助かった。流石にコイツを守りながらアレと戦うのは無理だ」

よし、このまま二人で立ち向かえば――…。

「ふーん、磁力で砂鉄を操ってンのか。おもしれー使い方だ」

……………無理だよな。

俺一人ならまだ何とか出来るかもしれないが、この二人がお荷物だ。

「タネが割れたらどーってことねェがな」

嵐から解放された一方通行は、今だに傷一つ無く、ニタニタと笑いながら、こちらに向かってくる。

「そんなっ、アレを食らって傷ひとつ負ってない!？」

美琴は美琴で何が起きたのか分からず、困惑しているようだ。

「―――、ッ!」

今度は、彼女は大量のレールを持ち上げ、

「このパワー……？、オマエ……」

ガガガ、と一気に一方通行へと振り落とした。

が、そんな攻撃が『反射』に通用するはずもなく、レールは俺達に跳ね返ってくる。

美琴の顔はみるみる絶望へと染まっていく。

「そうかそうか、オマエ、オリジナルかア」

静まり返った美琴の代わりに、一方通行が話し始めた。

「クローン共はオリジナルの代わり……てこたアだ、オマエとやればこのダリィ作業もグッと短縮できンだろオ？」

一歩。

「イイ加減飽き飽きしてたんだ。頼むぜエ、オリジナル」

また一歩と美琴へ近づいてくる。

それに対し、美琴はコインを握り、腕を一方通行へ向けながら対応する。

「何で……、何でこんな計画に加担したの……？」

「あア？何だイキナリ」

「答えて！こんなイカレた計画に協力する理由は何！？、あの子に恨みでもあったわけ！？」

一方通行は暫し黙り込み、口を開いた。

「理由？理由ねエ、そりゃあ……」

腕を月に向け、力強く宣言する。

「絶対的な力を手にするため」

瞬間、美琴は凍り付いた。

「最強だとか学園都市で一位だとか、そんなつまんねエもンじゃねえ。俺に挑もうと思う事すら許さねえ程の絶対的なチカラ、『無敵』が欲しーンだよ。オマエも超能力者なら分かんذار？」

「何よ……それ……」

だが、返答は全く違うものだった。

「ゼツタイテキなチカラ？。ムテキ？。そんな……」

美琴の声は震えている。

「そんな事でっ、アンタはっ、そんなッ!!」

そして、完全なる怒りへと変わった。

「そんなモノのためにあの子達を殺したのか――――――ッ
!!!!!!」

「おい、待てッ!!」

俺は止めようとしたが、遅かった。

ゴッ！！！と。

直後、オレンジ色の直線が、一方通行に放たれた。

それは音速の三倍で打ち出された金属片の一撃。

針のように細いその熱線は、もはや人間の視力では速度を感じ取れない。故に、人間が避けることは限りなくゼロに等しい。

その直線上に存在したあらゆる物体を丸々薙ぎ払い、吹き飛ばし、破壊の限りを尽くしていく。

『レールガン超電磁砲』

『第三位』の『超能力者』の少女が持つ切り札。

しかし、一方通行はそれすらも軽く凌駕する。

「……？ 何固まってんだよ。……ああ、そうか。悪い悪い、今の
がオマエのとおっておきってヤツだったんだな」

あらゆる衝撃を『反射』する一方通行にとって、『超電磁砲』などいちいち避ける必要もなかった。

「仮にも同じ『超能力者』だ。クク…、まさかこんなシケたもんだと思わなくてよォ」

ハッ、と気づいた時には、ズン！！と後方で轟音が鳴り響いていた。

勿論、一方通行に傷は無い。
むしろ、俺のほうが深刻だった。

『反射』された『超電磁砲』は、俺のミサカを抱えていなかった腕を、跡形も無く消し飛ばしていたのだ。

「……………そ…………ッ」

美琴は、切り札が通じなかったことへの衝撃と、俺の片腕の状況を認識したことにより、絶句している。

「いや、まあ片腕ぐらいなんとも無いけどね」

実際、ヴィクター化しているからだろうか、痛覚もあまり感じられず、妙に落ちついていられた。

「お待ち下さい」

——ああ、やっと来たか。

「計画外の戦闘は予測演算に誤差を生じるおそれがあります、とミサカは警告します」

その声ができる方向には、大勢の『妹達』が集結していた。

それぞれがリレーしながら話している彼女達に一方通行は悪態をついている。

「……………ハッ。そーいやア、自己紹介がまだだったな」

そして一方通行は、俺と美琴へと近づいてくる。

「『一方通行』だ。ヨロシク」

そう言い残し、彼は今度こそ帰路についた。

一方、残った『妹達』はそれぞれの後片付けの分担を決めている。

そこに、美琴が声を掛けた。

「アンタ達……何なの……？ おかしいよ……何でこんな計画に付き合ってるの？」

『妹達』は何も返事を返さない。

そこに、美琴は声を荒げながら、話し続ける。

「何だよ！！ 生きてるんでしょ！？ 命があるんでしょ！？ アンタ達にも…、あの子にもッ！！！！」

こんなの……これじゃ一体何の為に……、と小声で言っているのが聞こえた。

その言葉に、一人のミサカが対応する。

「ミサカは計画の為に造られた模造品です。作り物の身体に借り物の心。単価にして一八万円の、」

それは、美琴が求めた答えと最も掛け離れた返事だった。

「実験動物ですから」

こうして、新たな物語を告げる八月十五日は、終わりを迎えた。

第三話 転機（前書き）

久しぶりの投稿です。

第三話 転機

窓から見える景色はすでに明るく、小鳥の囀る声が聞こえてくる。

「……、」

……私、あの後どうしたんだっけ。

一先ず、周囲の状況を確認してみる。

「……、ここは……」

どこだろう？

私は、どこかの学生寮と思われる部屋で眼を覚ましたようだ。

部屋自体は別段変ったところもなく、新品と思われる生活用品がいくつかわかれてある。

「ああ、起きたか？」

「……、っ」

突然掛けられた声に、びくつ、と身体が震えたのが分かった。

「アンタは……」

ゆっくりと、おそらくこの部屋の主であろう者に、顔を向ける。

「ああ、まだ名乗ってなかったな」

声の主は、昨日の『実験』に突然乱入してきた男だった。

「俺は、亞城都垂。狂気のマッドサイエンティストだ」

・

・

・

「それで怪我はないか？」

「私は平気。むしろアンタのほうが重傷だったじゃない……」

そう言いながら、美琴は俺の腕を見て、眼を丸くする。

「アンタ、腕……、どうして……!？」

驚くのも無理はない。

消滅したはずの腕が直っているだけでなく、それが一日も経たず元に戻っているのだから。

「ああ、えーと、何から話せばいいのやら……」

俺は、嘘と真実を交えながら、美琴に説明を始めた。

学校には通っておらず、アルバイトをしている最中に『実験』のこ
とを知った。

再生能力を持っており、その力で腕は直った。

傷ついたミサカは病院に連れて行った。

女の子が一人で外で夜明しするのは良くないと思い、この部屋に連
れてきた。

やましい事は何ひとつしていない。

など、質問されそうな事は早急に話しておいた。

もちろん、転生者ということは伏せている。

「……………」

しかし、参ったな。

先程からなるべく明るく話しかけているのだが、美琴は意気消沈して、全く会話に乗ってくれない。

「……………何で」

「あん？」

「何であんな事ができるの……？」

「知るか。計画に関わってない俺に聞くのは間違いだ」

「……………そうよね」

そう言うと、美琴は無言でうずくまってしまった。

「お前は……妹達をどう見る？」

「……、私は……クローンを人間としてなんて見れないし、殺される事を受け入れている連中を助けようなんて思えない」

「……………」

「でも」

彼女は一拍置いて、答える。

「ひとのDNAマップをくだらない実験に使うヤツらを見過ごす気もないわ」

そう言うのと、美琴は腰を上げ、玄関へと歩いて行く。

「…………どこに行くんだ？」

「私が撒いた種だもの。自分の手で片をつけるわ」

「…………そうかい」

俺も玄関へと足を運びながら、美琴に話しかける。

「ああ、困った時は俺を頼りな。少しは手助けしてやるよ」

ありがとう。

そう言い残し、美琴は部屋から立ち去った。

……断言しよう。

アイツ、絶対に頼って来ない。

「まあ、別に良いけど」

たしか、研究機関を潰す時点では『超電磁砲』にとって造作無かったはず。

ということは問題は『アイテム』が出てくるところだけか。

「……いや、目的は達成するんだからそこまで問題でもないか？」

などと自問自答していると、急に頭の中で声が響いた。
言わずもがな、神からの念話である。

「はい、もしもし。亞城ですが、どちらさまでしょうか？」

『なかなか頑張っているようだな』

……無視かよ。

「それで、今度は何の用事だ？」

『いやなに、二つほど報告したい事があってな』

「報告？」

神様はゴホンとひとつ咳ばらいをして、ゆっくりと口を開いた。

『まず、ようやく転生者が揃った』

「え？ なにそれ？」

『……………この前話したはずだが？ この世界では、我が呼んだ転生者が全員集まると…………』

ああ、そういうばそんなこと言ってたな。

「それで、一番働いてる俺にそいつらの情報を提供してくれるってか？」

『その通りだ』

……え？ マジで？

『さすがに能力は無理だが、そいつらの現在の状況なら教えてやろう』

うん、やっぱ日頃の行いなわけよ。能力が聞けないのは惜しいが、せめて居場所さえ分かればこちらから行動できる。

『それで、聞きたいことはあるか？』

「ああ、転生者の人数、居場所、そいつらの今までの行動を洗いざらい吐け」

『どうして目線が上からなんだ？……まあ良い』

良いんだ……………。

『まず人数だが、お前を抜いて五十……』

「待てッ!？」

五十!?

そんなにいるの!?

『ふむ、どうした?』

神様はいかにも面倒臭そうに俺に話しかける。

「それは俺のセリフだ!! いくらなんでも多過ぎだろ!!」

『そうか? 五十から四十五引いて……………五人だな』

「紛らわしいわッ!!」

なぜにそんな面倒臭い話し方なの!?

何だ? わざとか? 狙ってやってんのか?

「…………まあ良いや。次は居場所を頼む」

『うむ、此処だ』

そう言いながら、神様はフローリングを指差す。

「……此処って何処よ？」

『だから、此処。この学生寮』

「……………」

今なんと？

「……アンタ、まさかこの学生寮に全員集めたのか…………？」

『そうだが、何か問題あるか？』

「……………」

駄目だこいつ…………早く何とかしないと…………。

『ああ、安心しろ。全員学生と呼べる年齢だからな』

そこじゃねえよッ！！

「神よ、聞いてくれ」

『む？』

俺は不平を言う為に思い切り息を吸い込む。

が、不満を爆発させる前にピンホーンとチャイムが鳴り響き、神とのリンクも切れた為、計画実行は中止を余儀なくされた。

「まったく、誰だよ」

俺は、邪魔をしてくれた人物の顔を拝もうと、玄関へ足を運び、ドアノブを掴んだ。

……思えば、神に連れて来られた時もそうだったが、転機が訪れるのは何時だって突然だ。

「初めまして」

ドアを開けると、眼前には、雪のように白い肌、端正な顔立ちに、床まで届きそうな漆黒のさらさらした髪。
そして、モデルのように細っこい身体の少女が、大きな瞳で俺を見つめながら立っていた。

「この度隣に引越してきた、北神久遠キタガミクオンです」

これが、俺が初めて出会った転生者であり、これから長い時間共に行動することになる彼女、『北神久遠』との初めての出会いだった。

第四話 適応（前書き）

今回も時間が空いてしまいました。
なるべく早く投稿するよう善処します。

第四話 適応

カチコチと、秒針の音がやけにはっきり聞こえてくる。

現在、時計は十時半を示しており、普段ならば職安に行ったり、買い物に出掛けたりと部屋には居ない時間帯である。

……にも関わらず、俺は台所で少量のお茶菓子とコーヒーを用意していた。

「……どうぞ」

「ありがとうございます」

それらを俺が此処にいる要因である客人に持っていく。

客人は、昨日から隣に引越してきたらしく、律儀にも挨拶に来て下さったらしい。

そのような人物を無碍に帰す事も出来ず、俺は部屋へと招き入れた。

だが、どうにも不安を拭い去れない。

それというのも、つい先刻、転生者が全員揃ったという報告を受けたのだが、……まあ、そこは別に構わない。

問題はその後、何処かのバカが、その転生者達を一カ所に集めやがったことだ。

その場所こそ、俺が住んでいるこの学生寮なのだが、どうにも都合が悪い。

転生者だと知られたら襲ってくるかもしれないし、弱みを握られるかも知れない。

その為不審に思われるのはなんとしても避けたいのだが、その分行動も大幅に減少する。

だって五人もいるんだぜ？

奴らはただでさえ他の転生者を警戒しているはずだ。加えて、――

「あの」

「え？」

「大丈夫ですか？」

見ると、客人もとい北神久遠は俺を不思議そうに眺めていた。

どうやら、思っていたよりも長考していたようだ。

……話が長くなったが、つまり何が言いたいのかというと、この目の前の少女が『転生者』なのではないだろうか、ということだ。

勿論、これは俺の独りよがりの推測であり、そんな訝しい者ではなく、この世界の普通の住人ということもあるだろう。

……だが、あまりにもタイミングが良すぎる。

俺は、なるべく不審がられないように彼女を覗き込んだ。

「あの、何か？」

………どうやら、俺には覗きの才能は皆無らしい。

多分、年齢は近いだろう。

改めてじっくり見てみると、やはり美人だと思う。

いや、美少女と言うべきかもしれない。

身長は日本女性の平均身長……ぐらいか？

白く繊細で、大きな瞳、小さく結ばれた口もと、そして意思の強そうな引き締まった顔。

「いや、年齢が近いかなー、なんて思ったり思わなかったり」

「いきなり女性に年齢の話をするのはどうかと思うけど……」

……いや、御もつとも。

「二応、十七です」

「……………俺と同年か」

「そうなんですか？ 亞城さんは……………」

「ああ、同年なんだから畏まらないで、呼び捨てでもいいけど？」

「そう？ それじゃ、亞城って呼ばせて貰うから」

「了解」

「私も上品なのは疲れたので」

そう言って彼女はほっと息をついた。

……………とりあえず、堅苦しい話し方は取り除けられたようだ。

「続きなんだけど、亞城はどこの学校に通ってるの？」

……………いきなり痛い所を突いてきたな。

「俺は学校には行ってないんだ。ちょっと、問題があって」

そう言って、久遠の顔色を窺う。

「……ふーん」

だが、彼女は特に気にしている様子もなく、先程と何ら変わらずに話しだす。

「同じね。私も今はどこにも通ってないの」

「……そうか」

なぜ？と喉元まで出かかったが、グツとこらえた。

ここで理由を尋ねても彼女は答えてはくれないだろう。逆に怪しまれる可能性すらありうる。

「………あ、そうだ」

「………？」

「これ、口に合うか分からないけど」

突然彼女は立ち上がり、俺に何かの袋を差し出してきた。
………ああ、挨拶品か。

「悪いな」

「……ん」

まだ不安は消えないが、根は良いヤツそうだし、友好的に話せる相手が出来ただけでもマシか。

・

・

・

……その後、特に情報は得られず、北神久遠は荷物を整理すること、帰ってしまった。

「びみょー、だな……」

怪しい所はあったが、残念ながら、彼女から転生者であるという確固たる証拠は見つからなかった。

まあ、だからってずっと見張るのも面倒臭いし……。

『ふむ、行ったか』

北神久遠が去ってから暫くすると、再び神様が語りかけてきた。
コイツに聞いたら教えてくれないかな？

「なあ、アイツも転生者なのか？」

『うむ、あの女もお前と同じ我に選ばれた者だ』

……おお！

あんなにも悩んでいた事があっさりと解消されてしまった。
なんだかんだ言っても役に立つな、この神。

「あ、それじゃ——」

『む？』

続いて質問しようとしたとき、急に神様は顔色を変えた。
その顔はどこか遠くを見ている。

「どうしたん？」

『……すまんが用事が出来た。続きはまた今度だ』

「あ、ちょっと待てッ！」

だが、返事は返ってこない。
どうやら、脳内回線は切断されたようだ。

「いったい何なんだよ……」

部屋は先程までとは打って変わって急激に静かになった。
普通に過ごしていた頃も家では一人が多かったが、やはりなんとも
言えない寂しさが在る。

そしてなによりも……、

「……………暇だ」

どうすっかなー。

あんま目立つ行動はしたくないし……。
アイテムと美琴が邂逅するのはまだ先だよな……。

散々迷ったあげく、俺はとある場所へと向かった。

・
・
・
「それで、どうして私の部屋にいるわけ？」

「いや、ただの暇つぶ——もとい隣部屋の住人として荷物整理の手伝いに伺った所存でございます」

「完全にに暇つぶしって言おうとしたよな……」

暇に耐えきれなくなった俺は、先程出会ったばかりの転生者『神北久遠』の部屋を訪れていた。

「訪れたというよりも侵入してきたと言う方が正しいんじゃない？」

「ほう、意外と質素だな」

「無視かよ……」

久遠の部屋は、利便性を追及したような家具ばかりが置いてあり、

可愛らしい装飾は全くされていなかった。

というか、一人暮らしの女の子の部屋ってこういうものなのか？
これなら俺の部屋の方がまだ……………。

「何か文句ある？」

「…………いえ、なにも」

睨まれた。

それはもう、もの凄い形相で。

この娘読心術でも会得しているのか？

「それで、手伝うことは何かないのか？」

「ああ、そういう建前だったわね」

建前…………。

どうやら、全く信じて貰えてないようだ。

「それじゃ、買い物行ってきて貰える？財布渡すから」

「…………今日会ったばかりのご近所さんをパシるとは、なかなか凶太
いな」

「なに、もしかして私喧嘩売られてるの？」

又もや久遠は俺を睨む。
ちよつとふざけ過ぎたか？

反省した俺は、彼女から財布を受け取り、逃げるかの如く部屋を抜け出した。

・

・

・

「……不幸だな」

買物袋を二つほど手に持ち、学生寮へと戻っている最中、俺はあまりの暑さに嫌気がさし、そんなことを呟いていた。

俺も買い出しする予定だったので、久遠の頼まれ事を引き受けたのだが……、

暑い。超暑い。

お天道様は今日も元気に働いていらっしやるようだ。

「大丈夫ですかー？」

ふと、背後から妙に子供っぽい声が聞こえた気がする。

後ろを振り向くと、確かに妙に子供っぽい女性が立っていた。

月詠小萌。

原作の主人公の一人である上条当麻の担任をしている教員。
だが、何分身長が一三五センチと低めなため、小学生にしか見えな
い。

「凄い汗ですよー。ちゃんと水分補給しないとダメなですよ？」

「……了解です。ところで、上条当麻は元気ですか？」

「はい？ どうして上条ちゃんの名前を？」

「実は生き別れの兄弟なんです」

「はい！？ そうだったのですか？」

小萌先生は予想以上に驚いていた。

「いや嘘ですけど」

「……………」

「えと、亞城都亜です」

場が気まづくなったので、無難に自己紹介をする。

「月詠小萌です。教師をしています、それより初対面の相手に嘘をつくのは良くないことですよ！」

「はあ、すみません」

若干涙目になっている小萌先生に、罪悪感を感じながらとりあえず謝る。

「むむっ！　あまり反省していないようですけど？」

「まあそうですね」

「……これは小萌先生、本気で叱らないといけないようです！」

彼女は、真っ直ぐにこちらの目を覗き込みながら説教を始める。

だが、残念ながらその容姿のせいで全然怖くない。
俺は汗を拭いながら、ふう、とため息をつく。

「ち、ちゃんと聴いてますか！こ、小萌先生はですね、本気で怒っているんですからねーっ！」

大声を出す小萌先生からは、見逃してくれそうな気配は微塵も無かった。

「（これは暫くは帰れそうにないな）」

そう思いながらも、この世界に来てから人との交流に飢えていた俺は、その会話をどこか楽しんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7973n/>

～転生～Until The Day I Die

2011年10月7日10時49分発行